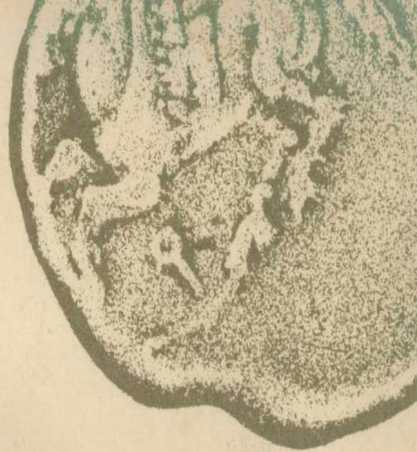


読売選書



竹西寛子

歌の王朝

歌の王朝



読売選書

読売選書

うた おうちよう
歌の王朝

昭和五十四年 六月十三日 第一刷

著 者 竹西 寛子
たけにし ひろこ

編集人 笠井 晴信
かさい はるのぶ

発行人 深見 和夫
ふかみ わく

発行所 読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の一 千一〇〇
大阪市北区野崎町八の十 千五三〇
北九州市小倉北区明和町一の十一 千八〇二

印刷所 株式会社 精興社
凸版印刷株式会社

製本所 協和製本株式会社

定 価 九八〇円 1395—301490—8715

©, Hiroko Takaishi, 1979
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

著者紹介

昭和4年広島生まれ。昭和27年早稲田大学
国文科卒業。作家、文芸評論家。おもな著書
は小説「儀式」、「鶴」(芸術選奨受賞)、「管
絃祭」(女流文学賞受賞)、評論「往還の記」
(田村俊子賞受賞)、「式子内親王・永福門院」
(平林たい子賞受賞)、「古典日記」、「月次抄」
ほか。

歌の王朝
目次

はじめに 7

ありてなし 世の中は夢かうつつとも夢とも知らずありてなければ 14

花に別れぬ春はなし 人知れずもの思ふことはならひにき花に別れぬ春しなければ 18

和歌と「蜻蛉日記」 ありとだによそにても見む名にし負はばわれに聞かせよみらくの島 25

浮葉の露 花に咲き寒になりかはる世をすてて浮葉の露とわれぞ消ぬべき 29

女の日記の石山詣 39

なきは数添ふ あるはなくなきは数添ふ世の中にあはれいづれの日まで歎かむ 47

心の花 色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける 57

うつせみの世ぞ 寝ても見ゆ寝でも見えけり大方はうつせみの世ぞ夢にはありける 60

露おき添ふる雲の上人・たづねゆくまぼろしもがな 65

いとどしく虫の音しげき浅茅生に露おき添ふる雲の上人

たづねゆくまぼろしもがなつてにても魂のありかをそこ知るべく

峰にたなびく薄雲は 入日さす峰にたなびく薄雲はもの思ふ袖に色やまがへる 71

水に数書く 行く水に数書くよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり 76

まぼろしの中 見しことも見ぬ行末もかりそめの枕に浮ぶまぼろしの中 79

憶えやすい歌のこと

86

亡き人の秋に心を・われあきはてぬ・亡き人の天翔るらむ・消えがてに降るぞかな

しき

90

枯れはつる野辺を憂しとや亡き人の秋に心をとどめざりけむ

のぼりにし雲居ながらもかへりみよわれあきはてぬ惜ならぬ世に

降り乱れひまなき空に亡き人の天翔るらむ宿ぞかなしき

消えがてに降るぞかなしきかくらしわが身それとも思はえぬ世に

和歌と「源氏物語」

100

まだふみもみず 大江山いく野の道の遠ければまだふみもみず天の橋立

111

名こそ惜しけれ 春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなく立たむ名こそ惜しけれ

123

枕だにせで寝しものを・おもかげに恥づ・いづれのよにか

130

知るといへば枕だにせで寝しものをちりならぬ名のそらに立つらむ

夢にだに見ゆとは見えじ朝な朝なわがおもかげに恥づる身なれば

うつつとも夢ともわかで明けぬるをいづれのよにかまたは見るべき

「衣通姫の流」 わが背子が来べきよひなりさがねの蜘蛛の行ひこよひしるしも

139

漢詩とやまと歌

147

歌合の判詞あるいは日本の歌論

154

むかしはものを	あひ見ての後の心にくらふればむかしはものを思はざりけり	161
いづくも同じ	さびしさに宿を立ち出てながむればいづくも同じ秋の夕暮	167
もののあはれは	春はただ花のひとつへに咲くばかりもののあはれは秋ぞまされる	172
きのふの淵ぞ	世の中は何か常なるあすかはきのふの淵ぞ今日は瀬になる	175
王朝の四季の歌		181
花の下	月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして	184
君や来し・心の闇に		191
君や来しわれや行きけむ思はず夢かうつつか寝てかさめてか		
かきくらす心の闇にまどひにき夢うつつとは世人さだめよ		
空ぞみらるる	つれづれと空ぞみらるる思ふ人天降り来んものならなくに	195
あとがき		199
索引		208

歌
の
王
朝

はじめに

古い歌でも、近い世の歌でも、暗記できていない歌についてはとかくものが言い難いというところがある。人には強いられた記憶もあればおのずからのものもあり、また、強制の半ばで自然になりかわる場合もあるから、記憶の成り立ちは、恐らくそれほど単純でもなければ絶望的な複雑さでもないのだろう。それにしても、暗記している歌には、その付き合い方は別として長年往き来している懇意な人の心安さがあるし、そうでない歌は、いくらいと思っても、向こうにもこちらにもどこか他所行きの感じが残っているような気がする。

強いられた記憶という時、私の場合すぐに結びつくのは戦争中の「愛国百人一首」で、当時の他の女学校の日常をよく知っているわけではないから、これが普通だったのか特殊であったのかは分らないが、在学した広島県立第一高女では、国語の時間の始めに毎回一首ずつを朗詠した。それも、テキストを手にしてというのではなく、目を閉じて席に着いている生徒の誰かが教師に指名されると、まずその人がその日の歌を暗誦し、そのあと他の者が揃って朗詠するという

仕組みになっていた。指名されて恥ずかしい思いをしなくなればつとめて憶えるということになる。

妙な仕組みでもあるが、選ばれた歌のよしあしではなく、記憶の方法として、それがすべてよくなかったとは言えないと思う。第一、十代の記憶力は、現在から振り返れば妬ましいほどのものであったし、切実でない内容のほうは端から忘れる知恵と健康にも人は恵まれている。それに、自由な読書とか自由な選択とか言っても、所詮、限りのあることだ。

そう言えば、「愛国百人一首」ならずとも、あの時分の女学校の教科書に載った歌には、多かれ少なかれ暗記を強いられている。どういう方の方針で、どういう方針での選択であったのか、当時の教科書には古い時代の歌ばかりでなく、近代や現代の歌人の作品も相当入っていた。きっといい作品も多かったであろうが、大方はよくも忘れたものだと驚くばかりで、闇に流されなかった歌を、それこそ思い浮ぶまま並べてみると、

くれないの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨の降る

瓶にさす藤の花房みじかければ暈の上にとどかざりけり

高槻のこずゑにありて頬白のさへづる春となりにけるかも

馬鈴薯のうす紫の花に降る雨を思へりみやこの雨に

幾山河越えさり行かばさびしさのはてなむ国ぞ今日も旅ゆく

夕ぐれを花にかくるる小狐のにこ毛にひびく北嵯峨の鐘

清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき

.....

.....

というようなことになる。とかく戦記物が教材では優遇されていた時期に、どのような「名歌」のアンソロジーが載っていたのか、今はもう思い出せない。

こうして暗記している歌を辿りながら、今でこそ「サクラヅキヨ」の字余りの強引さも、この場合は大して強引にも感じられないとか、小狐のにこ毛のふるえを、これほど絵と音楽にして詠んだ人がいるだろうか、とか、馬鈴薯の花の歌のように、初句が濁音ではじまるのはどうも、などと知ったふうな感想をもちますものの、アンソロジーの他の歌は忘れて、こういったものしか憶えていないというのがつまりはこの私なのであろう。

多くの人がそうであるように、教科書や副読本に一部だけ入っていて後年読み改めたものは少なくない。「万葉集」「古今和歌集」「枕草子」「源氏物語」「新古今和歌集」「徒然草」「初山踏^{ういやまぶみ}」、みんなそうである。また、女学校ででも読んでいなければ、まず読まないで一生を終わるような

ものもいくつかある。「駿台雑話」や「鶉衣」などにはそういう感想をもつ。

教科書とは関りなく、遊びとつながって憶えた歌となれば、これも私だけのことでなく、かるた取りのための「小倉百人一首」ということになるだろう。しかし、幼時の環境は子供にとってはほぼ完全な強制であり、かるた取りには、そういう環境の年中行事としての性格もある。したがって遊びとはいえ、これまた強制とは無縁であり得なかったと思うけれども、詠み上げる人の口調や節廻しがおかしくて印象に残ったとか、厳島で、紅葉を踏んで立つ鹿には馴染んでいるので、秋の鹿を詠んだものは忘れ難いとか、行くも帰るも、知るも知らぬも、のように、反対語で記憶したとか、そういう単純な理由で憶えた歌も混っている。

この百首が、時代の知識人の好みや、撰者であった藤原定家自身の好み、また、定家の、歌人、歌論者としての見識や矜りを反映しているのと言うまでもない。それを承知で、この百首を知らないよりも知っていてよかったと思う理由の一つは、「小倉百人一首」のかるた取りは、おおむね「自己形成」に先立つ時期の遊びで、だからこそ目以上に耳から鍛えられるこの遊びは、いい歌を読み分け、また詠む能力のためによりも、たとえ微々たるものではあっても、杜撰な言葉づかいに直感的に反映する何らかの力を養うのに役立ってはいはしないかと思うからである。国語と愛憎ふたつながりの格闘をしていたと思われる「小倉百人一首」の撰者の面目は、後年に及んで否応なしに認めさせられている。

国語で生きる者としての、人それぞれの未知の可能性を考える時、杜撰な言葉づかいを嗅ぎ分けさせ、それに違和感をおぼえさせるといふ、一見消極的な働きの意外な大事については、私自身年月を逐ってその切実さを強めている。このことは、いい言葉づかいをしようとするよりも、できるだけ曖昧でない言葉づかい、できるだけ不正確を避けた言葉づかいを志向するほうが先だろうと思うに到ったことにも通じていよう。

自分と歌とのつながりを遡ってながめているうちに、つい強いられた記憶のことに行き当たった。強いられた記憶は、しかし当然のことながら記憶の一部ではない。そこで記憶を強制されたおぼえない歌のあれこれについて考えてみるのに、この頃、何かの折には口にのぼる王朝の歌の多くは、いずれもある時期以後自分から近づいて行ったものであって、その時の動機に他者の意志は全く働いていなかった。嗅ぎ分けるようにしてしきりに求め、理屈抜きで惹かれていったその時期はそれほど早くはやって来なかったが、いったんその時期が訪れてからというもの、私は倦きることを知らないでいる。一方的な強制を外れたところでようやく「和歌」というものにおどろかされたとも、反芻の必要が生じたとも言えるだろう。

しかしそうは言っても、過去の折々に、何らかの動機で強いられて確かに出会っていないながら、内的必然性でつながっていなかったために心には残らず、時を隔ててのちに自分から近づいてみるとそれは再びの出会いであったという場合も少なくなかったと思う。たとえ最初の動機が何で

あれ、はじめてと二度目との開きは小さくない。いっばしの選り好みや自己主張をおぼえるよりも前に、「小倉百人一首」といわず、「万葉集」でも「古今和歌集」でも「唐詩選」でもかまわない、意味はわからなくても、せめて音読なりとも強制されるのは非常に望ましいことではないかと思うのもこんな時である。

私は歌詠みではない。けれども現代の分厚な表現論よりも、記憶の中の歌の一首のほうが、時としては原論としてのより強い説得力を兼ね、文章を書きたくさせることがよくあるのだと言えば、和歌と自分との関わり的一面は知られよう。また、あの「源氏物語」でさえ、「古今和歌集」のないところには結果的には成立し得なかったということの自分なりの納得も、日本文学の歴史の中の和歌を、以前よりもいくらかは離れてながめるようになった小さな例の一つかもしれない。

読売新聞社図書編集部の大野周子さんが、選書に一冊書き下ろすようにとすすめて下さったのはもう七年も前のことであるが、ようやく気持を決めてこの度「歌の王朝」を書き始めることにした。過去の私の古典についての厚顔しい発言は、すべて、国文学専門研究家の業績に助けられた愛読者の感動報告であるに過ぎない。そのことに関する限りこの度も又同類の作業になるだろう。

ただ、「王朝の歌」としないで「歌の王朝」としたのは、研究書ではない気安さから王朝の歌

についてそれこそ思い浮かぶままに書き連ね、脈絡の企てのないところがかえってある姿を鮮明にするかもしれない自分の王朝をみることでできればと思ったからで、主として好みの歌を窓口にしたわが王朝というほどの心である。例によって、出口の見通しは全くついていない。気持の弾みが頼りである。

著者

ありてなし

世の中は夢かうつつかうつつとも夢とも知らずありてなければ

「古今和歌集」にはこういう作品が入っている。それは、私の中では、こういう一首も入っているのが古今集だということであり、時にはまた、こういう一首が入っているのが古今集だということでもある。

「夢うつつ」とか「ありてなし」という言葉は、ことさら目新しい言葉ではない。同じ古今集の中にも、「君や来しわれや行きけむ思ほえず夢かうつつか寝てかさめてか」「かきくらす心の闇にまどひにき夢うつつとは世人さだめよ」とか、「世の中にいづらわが身のありてなしあはれとやいはむあな憂とやいはむ」などの詠は、ある。

しかし、「いづらわが身のありてなし」ではなく、冒頭の歌での、一瞬、肺腑をつかまれたような経験のあとでは、通念の帷とばりの彼方にあった古今集が、見違えるような親しさ、なつかしさで